
ゴット・パンプキンの憂鬱

傘月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴット・パンプキンの憂鬱

【Nコード】

N59710

【作者名】

傘月

【あらすじ】

カボチャの神様がハロウィンで無下にされるカボチャに対してお怒りのようで、下界へ行き復讐を企てる。そんなお話。

どこにでも存在するんだけど、どこにも存在しないところ。
そんなところに神は集う。

神にもたくさん神がいる。八百万の神とはよく言ったモノで、まあよく言うてはいるが八百万よりずっと神は存在する。人が崇めればその地点で神である。結構お手軽インスタントで神は出来る。イエスキリストでないと神ではないとかブッタこそが神であるとかそういう下世話話はどうぞあちらでして下さいまし。

そんないろんな神のなかの一人、かぼちゃの神は「野菜の神同盟」の議会でぼつんとつぶやいた。

「絶対に俺、冒瀆されてると思うんだよな」

カボチャ頭は目が丸く、口は逆三角形でぼつかりと黒い。我々で言うジャック・オ・ランタンのような顔だ。体はマントをかけて中身は見えない。そのマントから人間で言う骨のような手を出して頬杖をついた。

「自分ら人間が食べられないようなカボチャに品種改良してさあ、中身くりぬいて顔にして遊んだり、食べないくせに無駄にでかくしてはしゃいでるんだぜ？俺、絶対に喧嘩売られてるよな」

「カボチャ君の気持ち、わかるよぉー」

のったりした口調で同意するのはナスの神。

「僕らなんて、お盆になったら幽霊乗せて下界まで連れて行く強制労働させられてるんだよぉー。」

「おかげで神に召し上げられても手足は割り箸ときたもんだ。泣け

てくるぜえ」

ナスの神に同調するようにキュウリの神が言う。神の見た目というのは崇める人間のイメージに依存される。ソレを考えるとキュウリとナスの手足が割り箸というのもうなずけるが、神となるにはあまりにもあまりにもな見た目だ。

「……俺、ちよっくら復讐しに言ってくるわ」

ナスとキュウリが手足談義を繰り返すなか、カボチャは立ち上がった。

「復讐ってお前、人間にか？ や、やめとけよ神から墮落させられたら……」

「そりゃレタスのお前にや人間への恨みなんてわからねーだろうな」「わかるさ！ 俺だって子供に食べてもらえなかったり、なんか嫌いとか言われたり……」

「そうだよ！ その点カボチャはおいしいおいしって食べてもらえてるじゃないか！ ピーマンなんて名前出ただけで子供が泣くんだぞ？！」

Bannon！ とカボチャの神が机を叩いた。その場にいる神々がヒツと声を上げて飛び退いた。

「お前らには一生わからねえよ、ただの遊びでくり抜かれるカボチャの叫びを、飼料とされるために人間は食べられないよう品種改良されたカボチャの悲しみを……お前らに解るか？！ わからねーだろ！！」

カボチャの神が怒号する。あまりの勢いに他の神々は反論も賛同

も忘れてただひたすら恐ろしいモノを見るような眼でカボチャの神を見ていた。

「復讐してやる……俺は人間に復讐してやるんだ……」

ぼそり、とつぶやくとカボチャの神はさつと姿を消した。

さて復讐とは言ったが何から始めようか。

何百年ぶりぐらいの下界をさまよいつつカボチャの神は考えた。どうすればカボチャの神らしく、カボチャで人間を懲らしめようか。他の野菜の神に頼めば一週間ぐらいカボチャ以外の野菜を世に出さないことぐらい可能だが、ああして出てきてしまった以上戻りづらいのも事実だ。なにかないものか。何か、徹底的にカボチャをないがしろにしてきた人間に目に物言わせる何かはないものか。

「とりつくおあとリーと！ とりつくおあとリーと！」

あめ玉を転がすようなかわいらしい声がして、そちらを見ると、カボチャを模したプラスチックのランタンのような手提げを持った子供たちが四人、列をなして歩いていた。

「とりつくおあとリーと！ とりつくおあとリーと！ おかしをくれなきゃいたずらするぞー！」

なるほど。それは逆を突けばお菓子をあげなきゃいたずらしてくれるということになる。神が自ら手を下すと野菜の神を統括する神（名前はあえて出さないでおこう。君たちの想像するソレが最高神になる）に罰を与えられるが、正当防衛ならおそらくは大丈夫だろ

う。

そつと近づいて、子供達に声をかける。

「やあ、今日は良い天気だねえ」

あくまでもさわやかに、あくまでもさわやかに。

「……うっわー！　すげえ！　おばけのコスプレだ！」
「ほんとだ！　かぼちゃのコスプレだ！」

……大失態だ。人間に擬態するのをすっかり忘れていた。何せ何百年も天界でこの姿だったからなあと自分に言い訳をしつつ逃げる体制に入る。

「みーちゃんねえ今日は魔女っこさんなの！　似合うー？」
「俺ミイラ男なんだぜ！　かっこいだろー！」

しかしこんな奇妙な姿をしても子供達は気に懸けず、カボチャの神の周りをくるとまわり自分たちの衣装を見せてくる。……どうやら西洋のお化けや魔女に擬態しているようだ。それならこのままの姿でも大丈夫だろう。

「あ、そうだ、お兄ちゃん、とりつくおあとりと！」
「とりつくおあとりと！　おかしをくれなきゃいたずらするぞー！ー！」

よしキタ！　と、思わず膝を打ちそうになったがそれを抑えて、にやつく顔を無理矢理力ボチャ顔なりに残念そうな表情を装った。

「いやあ、もうしわけないんだけど僕今お菓子持ってないんだよ」

さあ来いさあ来い。こっちはもう臨戦態勢だぞ。

「えー！ まじかよ！ じゃあいたずらいいなだな！」

「いたずらー！」

ぶーたれた顔をしたミイラの男の子。キャツキヤと笑う魔女っ子。気付くと後ろには狼男を模した男の子と、メドゥーサを模した女の子がニタニタと笑い、じりじりとこちらに近づいてきた。さあ来い。来たときがお前らの最後だ。

「しかし、神そのものが来てくれるとはハロウィンも捨てたモンじゃないな」

ミイラの男の子がつぶやく。さっきまであつた無邪気さは無くなり、それを合図にか場の空気が変わった。

「だから言っただじゃない。カボチャが大量に虐殺されるこの行事をこいつがみすみす逃すわけがないって」

魔女のコスプレをした女の子が言う。身にまとう雰囲気はもはやコスプレでなく彼女を魔女そのものに仕立て上げていた。

——え、もしかして……ハメられた？

「んじゃ、いつちよ神狩り、いきますか」

「末席の神でも神は神だもんな、きつと彼の人もお喜びになるはずだ」

じりじりと近づいてくるそれはもはや驚異でしかなく、末席の神である自分が魔の者の、しかも四人を相手にするなんて無茶な話だ。

「カボチャの神、我らの悲願のために……死ね」

「『我らの悲願のために……死ね』」

なんて青いんだろう、なんて青くて恥ずかしいんだろう。もんどり打ってじたばたしたくなるぐらい、青く恥ずかしい書きかけの小説を見て俺は恥部をさらして往来をあるいているような恥ずかしさを覚えていた。なんでカボチャなんだよ、なんでカボチャが神なんだよ、そしていきなりの幼子が敵設定、無理にも程がある。

「おい、いい加減行くぞ。天使長がお待ちだ」

「はいはいっと。んじゃ、おつとめ行きますか」

カボチャに神が存在するかなんて一天使である俺にはわからないけど、実際にたらとも申し訳ないものを書いてしまったなあなんて思いつつ、俺は翼を広げて大空へ飛び出した。

（後書き）

ピグ部活「物書きの集い」10月テーマ「神様 カボチャ」で書いたものになります。

最後のオチはエルシャダイブームに便乗したつもりだったりします。

Q・全然便乗してないように見えるが大丈夫か？

A・大丈夫だ、問題ない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5971o/>

ゴット・パンプキンの憂鬱

2010年10月30日21時58分発行